



[評者]

上野 文昭

大船中央病院特別顧問

消化器診療 プラチナマニュアル

小林 健二 著

●三五変 頁 288 2021 年 7 月

定価：2,200 円 (本体 2,000 円+税 10%)

[ISBN 978-4-8157-3023-9]

メディカル・サイエンス・インターナショナル刊



“大切なものは目に見えない”

(サン＝テグジュペリ著『星の王子さま』より)

『消化器診療プラチナマニュアル』と題された小さなマニュアルが、このたびメディカル・サイエンス・インターナショナル社より上梓された。著者は小生が日頃から敬愛する優れた消化器内科医、小林健二氏である。一口に消化器疾患といっても、消化器は口腔から肛門までの消化管に加え肝胆膵などの性格の異なる臓器を含み、消化・吸収、運動、代謝、免疫などの多彩な機能を担っている。病因・病態もさまざまで、診断的検査は膨大であり、治療アプローチも薬物治療だけでなく、外科手術、内視鏡治療、IVR など選択肢は多彩である。よい消化器診療のためには内科全般にわたる広い知識・技術と多少の外科的知識が必要であり、驚異的なコンパクトサイズの本を手にして、本当にこれで大丈夫なのかというのが偽らざる第一印象であった。

内容は3部構成である。第1章に主な消化器治療薬、検査・手技が解説されている。治療薬の網羅性はむしろ十分以上で、消化器専門医が日常使用する薬剤の範囲を超えるほどであり、本書の読者対象には参考までという辞書的な役割を狙ったものと思われる。検査・手技は逆にきわめて簡潔に記載されているが、それぞれの概要・適応・注意点をしっかり把握することが、患者にとって無駄で有害な検査介入を防ぐうえで重要である。

第2章は消化器関連の症候学である。消化器の臨床症状・徴候をこれほどの確にまと

められる医師は、わが国で小林健二氏以外に知らない。消化器領域では、限られた研修期間の多くを検査・手技の習得に費やすため、もっと大切な検査前の診断技能に乏しい医師が少なくない。若手医師はこの章の大切さを噛みしめていただきたい。

第3章の疾患各論では、代表的な疾患の要点が簡潔に述べられ、困ったときのリファレンスとして活用できる。日常よく遭遇する慢性便秘症の治療や、過敏性腸症候群の定義・診断などは、ベテラン消化器医でも誤っていることが少なくない。これからの若手医師にはぜひ正確に覚えていただきたい内容である。

さて意地悪く粗探しをしてみよう。コンパクトなので内容の不足を感じないこともないが、無意識に比較対象として評者の頭に浮かんでいたのは2,000頁もある消化器内科学の教科書である。この金字塔的な教科書を思い浮かべたということ自体、本マニュアルが只者ならないことを示唆している。明らかな弱点はそのサイズ故、眼鏡をかけないと文字が読めなかったことである。しかし読者対象が比較的若手ということで、これは欠点にならないであろう。

冒頭に記された5大原則はどれも忘れてはならない金言だが、最後の「形のあるものには働きがある」に特に注目したい。働きは目に見えない。見えない病態を推察し、的確に治療するのが内科医の役割であろう。読者が本書からその姿勢を読み取っていただければ、よりよい消化器内科医が多数輩出することになるう。